

説教 『 時機と永遠を思う心 』

小河信一 牧師

コヘレトの言葉 3章1節～22節

コヘレトの言葉3:1——

何事にも時があり

天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

私たちの人生の中には、さまざまな「時」または「定められた時」（時機）があります。この場合、「時」というのは、比較的短い「時」、すなわち、その期間で言えば、一時間、一日、一ヵ月などを指しています。後の方には、この「時」（時宜）が「永遠」と対置されて登場しています（コヘレト3:11）。それが、具体的にどんな「時」であるのかは、次のコヘレトの言葉3:2-8で列挙されています。

コヘレトの言葉3:2——

生まれる時、死ぬ時

植える時、植えたものを抜く時

例えば、「生まれる時」と「死ぬ時」というように、コヘレトの言葉3:2-8には、相反するような時が並置されています。それらの時のほとんどが、私たちの生活に深く関わるものです。

J.A.ローデルに従って図式的に言えば、私たちの人生上、一方には、生と幸福の極があり、他方には、死と損失の極があります。一つの極から他の極へ、柱時計の振り子が揺れるように、私たちの人生の中に、それぞれの時が姿を現します。その際、私たちにとって厄介な事は、次のローデルの説明に言い表されています。

「この詩が、絶えず一つの極から他の極へと動くように、人生の状況も人間の上に臨み、人間は全くこれらの状況に引き渡されてしまうのである。」

つまり、人間には為す術がほとんど無い、ただ人間は、苛烈な状況に巻き込まれてしまう、抗い得ない、という事です。

生と死との両極の間に、さまざまな時が入り混じり翻弄されてしまっている人間のそばに、偽の知恵教師が近づいて来ることがあります。

偽の知恵教師曰く、賢い選択により、死と損失の極から生と幸福の極へと切り換えられる方法をお困りのあなたにお教えしましょう、と。これは、自分の「不幸」から脱却したいと焦っている人には、誘惑となります。なぜなら、人は誰しも、「泣

く時」(コヘレト3:4)が一刻も早く過ぎ去って、「笑う時」(同上)が来ればよいと願っているからです。

真の知恵教師であるコヘレトは、負の極から正の極へ切り換えられるか、すなわち、どうすれば、人生の中のさまざまな時を制御できるか、については沈黙しています。

コヘレトの言葉3章を見渡すと、コヘレトが直視していた「時」が分かります。

同書3:19——

人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊をもっているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。

同書3:22——

死後どうなるのかを、誰が見せてくれよう。

並行する「時」の初めに「死ぬ時」が挙げられ、終わりも「死後」で閉じられています。ラテン語の警句「メメント・モリ」(なんじは死を覚悟せよ。自分がいつか必ず死ぬことを忘れるな)は、コヘレトの思想の系譜にさかのぼると言えるでしょう。

「人間にとって最も幸福なのは 喜び楽しんで一生を送ることだ」(コヘレト3:12他に2:24、3:22)との繰り返し句から分かるように、コヘレトは決して悲観論者ではありません。しかしまた、今だけ、楽しめばそれでよい、というような快樂主義者でもありません。今の幸いを神からのものと感謝をもって喜びつつ、死というものを見つめているのです。

コヘレトは、真理の光が、人間はじめ被造物と死との関係、つまり、「すべては塵に返る」(コヘレト3:20)という現実こそ当てられるべきだと考えています。すべてのものを御破算にする死の脅威に向き合っていた、その点で、コヘレトはキリストの弟子です。

ルカ福音書12:16-21「愚かな金持ち」のたとえ——

¹⁶ それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。¹⁷ 金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、¹⁸ やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、¹⁹ こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しむ」と。』²⁰ しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。²¹ 自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

コヘレトは生きながらえながらも、周りの人が死に、また、動物も死ぬという現実

から目をそらしませんでした。

「死ぬ時」をはじめすべての時を支配される神を信じないままに、いくら財産を積み上げ、余暇を過ごす準備をなしたとしても、ひと度、死が襲い来れば、その人の人生は空しいものとなる……コヘレトは、このように非常に大きな問題に、私たちを向き合わせようとしています。

コヘレトの言葉3:11——

神はすべてを時宜^{じぎ}にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない。

コヘレトの言葉で最も有名な言葉の一つです。「神はすべてを時宜^{じぎ}にかなうように造り」を直訳すると、「神はすべてをその時に美しく造った」となります。

神が、私たちの人生に臨ませる「破壊する時、建てる時」または「愛する時、憎む時」（コヘレト3:3,8）が「美しい」と最高の賛辞^{てい}を呈しています。当然のことながら、私たちは、人を憎んでいる時の、あるいは、人から憎まれている時の、どこが「美しい」のか、ふさわしいのか、と思い巡らすでしょう。現に、神は人間を嘆き悲しませることなど、一切ないとは言っておられません。

神からご覧になって「美しい」というのは、私たちの人生に「破壊する時」や「憎む時」が在ることをご存知のうえのことです。コヘレトに啓示された「美しい」という一句の中に、一つの極から他の極へ、振り子が揺れるような状況のもと、不安定極まりない私たちの人生を、安定へと、平安へと、嵐の中の静けさへと導く神の御心が現されているのではないのでしょうか。

さて、コヘレトの言葉3:11は、「美しく」のみならず、全体としてキリスト教的人生観が凝縮されているような深い内容を含んでいます。

その中心は、「神はすべてを時宜^{じぎ}にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる」という一文の「神は……人に与えられる」にあります（神が「与える」は直前の3:10にも出ています）。そこで問われているのは、私たちが、すべてを神からの賜物として「受け取る」かどうかです。「なぜ、このような時を」という疑問と苦悩を抱きつつも、神が私に「きのうも今日も、また永遠」（ヘブライ13:8）をも与えてくださっていることを信じるのです。

後続の文に「神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない」（コヘレト3:11）と記されているように、神の支配する「時宜」と「永遠」とは、私たちにとって計り知れないものです。ここで私たちは、「時宜」と「永遠」と二つ組になっていることに留意したいと思います。

すなわち、主なる神は、私たちの人生、その時々^{ときどき}に必要なものを与えてくださる

と、同時に、はかないようにも見える私たちの人生を永遠の中に置いてくださいます。その点で、キリスト教的人生観は、刹那主義……今だけが大事……でも、理想主義……明るい未来に賭ける……でもありません。主にあって、今を一所懸命に生きつつ、それと共に、主にあって、自分の心の内に永遠なる時と世界への期待を抱いている……それが、キリスト教的人生観と言えるでしょう。キリスト者の人生は、この世の時々では終わらない、期間（人の寿命）限定ではない、永遠なるものなのです。

コヘレトの言葉3:11に関わる留意点の最後になりますが、「永遠を思う（人の心）の「思う」について説明します。この「思う」という言葉は原文にはありません。「神は永遠をもその人の心に与えた」が原意で、先に述べたとおり、私たちに求められているのは、「ただ（無償です！）、ひたすらに受け取る」ことです。自分は、永遠など「思い浮かべられない」とくじけてはいけません。また、永遠を透視しよう、未来を思い描こうなどと努力してはなりません。それだと、神が人に与える永遠ではなく、人が描き出す永遠（の虚像）になってしまいます。

自分の思いや行いを先行させてはならないというのは、次の注解者、J.A.ローデルの指摘にも表されています。

「コヘレトは、人が何をなすべきかを語るのではなく、ただ人がどのような状況に着地したのかを記述するのである。」

神の支配する計画と歴史のもとで、「美しく」時機と永遠の中に置かれている人、その中に安らかに住み、憩っている人は、幸いです。その幸いを、‘Bloom where God has planted you.’ 「置かれた場所で咲きなさい / 神が植えたところで咲きなさい」と、有名な英語の詩はうたっています。

神から与えられる時において、私たちが一つの極から他の極へと揺さ振られる中で、主イエス・キリストは、警えるならば、湖上の舟の錨いかりになっていてくださいます。

ヘブライ人への手紙6:19 —

わたしたちが持っているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨いかりのようなものであり、また、至聖所の垂れ幕の内側に入っていくものなのです。

まことの希望であるキリストの福音は、荒れ狂う湖において、安定した支えとなります。教会という舟は、その錨のゆえに、危ない方向に流されるのを避けることができます。キリストは、聖霊の風を送り、時に停泊させ、時に出帆・進行させながら、その舟を正しい方向へと導かれます。

本来、「永遠を思う心」を持ち合わせていない私たち、とこしえの天の国を仰ぎ見る目を曇らせてしまっている私たちですが、キリストの福音によって、すなわち、主

イエス・キリストの十字架と復活によって、私たちは永遠の命を待望しています。

ヘブライ人への手紙9:27-28——

²⁷ また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっているように、²⁸ キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。

ヘブライ人への手紙の著者は、これからやって来ること……死と最後の審判……について、見通しを与えています（J.レイリング）。この見通しのゆえに、キリスト者は、今ある時々を一所懸命生き、死を乗り越え、そして、永遠の命という希望を掲げることができます。

人間とキリストとにおいて共通するのは、「ただ一度死ぬ」（キリストは「ただ一度身を献げられ」、十字架の死を遂げられた）ことです。その一点において、「人間には……いるように、キリストも……」と、キリストと人との結び付きが指し示されています。それは、空しく死に、後は裁きを受けることしか残されていないような私たちに、憐れみの主、キリストが関わってくださっているということです。キリスト讃歌の一節に、「人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで」（フィリピ2:7-8）と歌われているように、キリストの、罪と死とに取り巻かれた人間への連帯は、畏れ多いものです。私たちを愛し抜かれたキリストの愛によって、私たちの罪と死は覆われてしまっています（箴言10:12、Iペトロ4:8）。

再臨の主イエス・キリストとの出会いという「これから先の時」を待望し、その時に、キリストの十字架と復活という救いを、心から喜び祝えるようにと願います。だからこそ、世にいる間、旅人として、神から与えられるさまざまな時の中を歩いていくのです。